RIPPLE SAILING CLUB
NO.77

月刊 1989・2.15

RIPPLE

（発行） 500円
リプル・セイリングクラブ
〒238−03
神奈川県横須賀市長井2−11−1
℡ 0468−57−1711

"眠らしてたまるか!! スキーツアー

本格的なセーリングシーズンを前に、今年"ほいちょい"の影響でめちゃくちゃ流行ったスキー旅行のご案内です。
今年のスキー旅行は、題して"眠らしてたまるか！スキーツアー"です。景品の数量は勿論のこと、企画に関しても現金ビンゴ大会、各スポットの芸人のパフォーマンスとか、う○ビデオ大会とか、混浴露天風呂ミニツアーなんかもあり、なんだかスキーなのか、宴会をするために行くのか判らないようなツアーです。
まっ、とにかく今年いっぱい海の上ではライバル同士になるんですからせめて流されたときのは、いち早く、またただでレスキューされるためにも、めいっぱい愛嬌で顔を売っておいて下さい。

日程	3月10日夜（金）〜3月12日（日）迄
場所	菅平高原スキー場
宿泊場所	プチペンション ゾンタック 長野県小県郡真田町菅平高原 〒386-22 TEL 0268-74-2321
費用	一人 19,800円
集合場所	ヤマハ新橋店(03-572-2020)前
集合時間	19時30分（厳守）

＊＊＊注意＊＊＊ 当日はリプルは全面休業です。

ニュー アルバイト 紹介 久保田文彦 DES

今度西郷君の代わりでアルバイトをすることになった、久保田文彦です。
一年くらい前からちょくちょく来ていましたが、今年になって本格的にリプルでアルバイトをすることになってしまいました。
現在西郷君と同じ学年で家が近いです。（高校は違うが中学は同じです）春からは京浜急行の西郷君と異なって、某大学の建築学科に一時間半をかけて通学する大学生になります。
最近これといった趣味はありませんが昔（2、3年前位まで）は、釣りが好きでトローリングや船釣り以外はほとんどやっていました。
ただ、今は北海道へツーリングへ行く旅費を稼ぐことしか頭にありません。そのためのせいか昼間は普通免許を取る為に自動車学校に行きそしてリプルでアルバイト、夜は夜で1時までガソリンスタンドでアルバイトという、友達に馬鹿扱いされながら、このハードスケジュールをほぼ毎日やっている僕をどう思うか判りませんが、僕はこれだけ一つのことに熱中してしまう性格です。
これから毎週日曜日は来ていると思いますが、もし黒いバイクが無かったらその日は休みか渋滞のために遅刻だと思って下さい。一応ヨットについては全然知りません。今リプルで開発中のパラグライダーについても知りませんし、リプルに来る人もほとんど知らない人達なので、少しとまどってしまうと思いますが頑張りたいと思います。
以上で自己紹介を終わりたいと思いますが、これから宜しくお願いします。

'89 第1回リプルカップのスキーツアーの為4週に行こうます。
レース族の皆さんそれまでまってね。

初日の出クルージング（女子高3族 大森育世）

私は生まれてから今までに、初日の出を見た事が無かったので、高校時代最後の正月にリプルの初日の出クルージングに参加した。
元旦は晴れるという天気予報を100%信じて、日の出が見れないことなど少しも予期せずに何を着て出かけようかと、前からあれやこれやと迷ったあげく、ルンルンした気分で友達の川崎一の美少女よう子と八千代寿司え向かった。
7：00やがて年の暮れの鐘の鳴る頃に、歯医者の高木さんと最多出艇者の山崎さん、長倉社長、塩野谷さん、中年男子4人が暗い雰囲気でみんなが集まるのを首を長くして待っていた・・・・・が、私達が到着して少し雰囲気が明るくなったようだ。
吉田さんと小林さんも少し遅れて着き揃ったところで乾杯をした。
八千代寿司を出た。どう見ても30〜40才も親父と女子校高生の奇妙な私達一行は三崎マリーナに向かった・・・が、先頭を走っていた山崎さんが赤いランプを発見し、車を止めるや否や慌てふためいて私達の方へ走ってきた。「検問らしい。」と言う山崎さんの言葉にみんな恐怖を感じた。
長倉社長は、さっさとみんなを置いて猛スピードで反対の方向へ逃げてしまいます。残された人達もみんな飲酒運転だったので、どうなることかと思いましたが、その時勇気ある高木さんが偵察に行き、結局ただの事故と言うことがはっきりしたので安心しました。
真相が判ってみると"なんだそんな事だったのか"と、とにかくファミリーマートの駐車場に車を止めて食料を買い込みました。中でも気に入ったのはプリンアラーモードで高木さんも好きだったのは驚きでした。
こうして無事三崎マリーナに到着しました。
夜の三崎マリーナは、巨大なクルーザーが数本のライトに照らされて、とてもロマンチック・・・・。
"恋人同士だったらなお良かったのに"と私は心の中で叫んだ。
ヨットの中にポツリ、ポツリと明りが見え私達と同じように船の中で年を越そうとする人達のにぎやかな声が遠くに聞こえます。クルーザーの中では3本の懐中電灯だけが頼りで薄暗かった。
10：00PM頃、車があればどこでも生活できるようなサバイバルグッズをいつも持ち運んでいる小原さんが登場し薄暗かったクルーザーの中で、強力な石油ライトを得意そうに点火すると一気に明るさが増しました。
床屋にいってさっぱりした塩野谷さんは家庭へのサービスで、初詣に出かけた後で、その時はすでに居なくクルーザーの中では、ヘビースモーカーとノンベーをたしたような小林さんとひたすらロイヤルを飲み続ける長倉社長、そしてサバイバルグッズ収集家の小原さん、話を盛り上げている山崎さんと睡魔に襲われて既に眠ってしまっている吉田さんと私達ブリッコ二人組で話が弾み楽しい雰囲気でした。
そうこうしている内に年が開ける12時ちょっと前にクラッカーを準備し、元旦を祝った。
その後仮眠したが5：00AM、よう子の「トイレ」という言葉で目が覚めた私は彼女のトイレにつき合った。外はまだ暗く冷やかだったが、さわやかな気分は何物にも替え難い。

熟睡している吉田さんを除いては既にみんな赤い目をしながら起きていました。やがて３時に家を出たという長谷川夫婦、杉田夫婦、片桐さん、目崎さん、宮本さんカップル、一度家に帰りまた来た高木さん達が次々と到着した。

さー、待に待った日の出だ。しかし外はどんよりと曇り風も強かった。がそんなことはおかまいなし。途中うねりがすごく波のしぶきで良く判らなかったが、雨がばらばらと降っていたようだ。

日の出は拝めず、結局強風のため三崎マリーナにＵターンする船も多く、デリバランス号も例外ではなかった。日頃の行いが大変良いせいか、私の念願の初日の出を見る夢も跡形もなく崩れさってしまった。三崎マリーナに着くと、数の子とかまぼこをつまみに乾杯をした。みんな話は寒さでひきつってはいたが、すがすがしい笑い声が三崎マリーナに飛び交い気分は爽快だ。

９：００ＡＭ海南神社へ向いお参りをすると疲れてはいても、ホッとした充実感で安らぎが心に広がって来る。

そして、リアルに到着すると着いたとたんに眠ってしまう人も居ればまだまだ飲み続ける人もいるし、ＴＶにしがみついている人もいる。そんな中、塩野谷さんがみんなが見守る中、パラグライダーの実験を行った。ハーネスがずれていたのか、手に汗を握る数分間の長い戦いのすえ、顔から地面に激突しあごをぶつけて大量出血をした。パラグライダーは危険であると言うことは私も良く聞いてはいたが、それを実践した結果となった。

元旦そうそうこのようなハプニングを迎えてしまった私は今年１年どうなるのでしょうか。人のことは笑えないと痛感しています。

ともかく１０代も残りわずか、今年も人生の真の喜びや生きがいを生み出せるように思いっきり青春するぞ！！！！。

SFショートショート

初めての遭遇

高槻和宏

４年間に及ぶ航海を終えて宇宙船は未知の惑星に到着した。条件の整ったこの惑星には生命体の存在が期待されているのだった。

３人の乗組員たちは異種の生命体との接触という世紀の一瞬を前に緊張していた。

星の表面はほとんどが密度の高い液体に被われていた。船長はこの液体を採集、分析するように乗組員の一人に命じた。液体中にはある種の有機物が含まれている公算が高い。原始的な生物と言える。乗組員達の期待はさらに高まった。

その時、別の乗組員が大声を上げた。宇宙船の前方のスクリーンに突如として宇宙人の群れが出現したのだった。

宇宙人、いや、あまりにもグロテスクな姿をしているので宇宙生物と言った方がいいかもしれない。

体全体は鱗に被われ、手も足もない。知能水準はかなり低いようだが攻撃的ではないようだ。珍しそうに宇宙船の回りを取り巻いてはスクリーンに体を擦り寄せてきた。特殊強化ガラスでできているとはいえ、冷や冷やする。

いろいろな方法で話しかけてみるがまったく反応はなかった。

船内は興奮に包まれていた。異種生命体とのファーストコンタクトは平和のうちに終わった。

「捕獲しますか？」

乗組員に聞かれて船長は戸惑った。もしも我々が他の宇宙人に誘拐されたらどうなるか。いくら彼らの知的水準が低いからといって許されることではないだろう。

と、その時スピーカーから甲高い声が聞こえたかと思うとものすごいスピードで黒い巨大な固まりが宇宙人の群れの中に突っ込んできた。

宇宙船ほどの大きさをしているが、明かに生物のようである。黒光りした肌には鱗はなく、どうやらかなり高い知能を備えているようだ。盛んに宇宙船に向かって話しかけてくる。

悪気はないようだが何しろ相手の体が大きいので危険を感じた船長は発進を命じた。宇宙船に登載された２機のコバルトエンジンが轟音と共に出力を上げる。

回りを見回すとあっという間にその巨大な宇宙人たちに囲まれていた。

あたりは彼らのつくり出す激しい水流で乱されている。

出力を最大にし猛烈な轟音とともにその群れの中から脱出しようと必死の試みがなされた。最新鋭のコバルトエンジンの雄叫びも宇宙人たちの叫び声で掻き消されんばかりだった。

やっとの思いで水面を突き破った時には乗組員は汗でびっしょりになっていた。

どうやら彼らはここまでは追って来れないようだ。気体との臨界面から顔を出してこちらをうかがっている。

「彼らの言葉を解読できないのか？」

「今やっているところですが。」

巨大な体を見えかくれさせながら盛んに話しかけてくるのだが、最新の翻訳機を駆使してもなかなか彼らの言葉は理解できなかった。

「船長大変です。」

レーダーをにらんでいた乗組員が叫んだ。

「巨大な宇宙船のようなものが近づいてきます。」

「高度を上げろ。」

度重なる緊急事態に船内は騒然となった。

乗組員たちはスクリーンに目を凝らした。

固唾を飲んで見守る乗組員たちの前に徐々にその異様な物体は姿を現わした。明らかに生物ではない。白く巨大な乗り物だ。

「でかい。」

「推進機関は何なんでしょうね。」

「解らん。我々の想像もつかないような新しい推進装置だ。」

巨大な船体は音もなくその臨界面を進んでいた。

白く大きな三角形の装置がエネルギーを供給しているようであった。

「危険だ！高度を上げろ。離脱する。」

「ＵＦＯです。ＵＦＯが。」

俺は若いクルーにたたき起こされて、キャビンから出た。

ワッチが空けてぐっすり眠っていたのに。

「なに寝ぼけてんだよ。」

俺は明らかに不機嫌な声で言った。

「ＵＦＯが出たんです。今そこに。」

「どこに？」

他のクルー達もデッキに出てきたがそれらしい物はどこにも見えない。

「小さいんですよ、それが。この位の大きさで。」

彼は両手を広げて必死に説明するのだが、回りの反応は冷たかった。

「なに言ってんだよ。寝ぼけてんじゃねーよ。」

「まったくもう。俺は寝るぞ。」

クルー達は口々に文句を言いながらキャビンに入って行った。

今日もヨットは快調に走っている。

貿易風が心地よく吹き渡るここは太平洋のど真ん中、見渡すばかりの海であった。船の回りにはイルカの群れが集まってきていた。白い帆が力いっぱい風をはらむ。

今だに呆然としているワッチのクルーを一人残して、俺もキャビンに入った。イルカがなれなれしく摺寄って、甲高い声で鳴いた。